

北部九州を起点とした弥生時代の墓制

常松 幹雄（福岡市経済観光文化局 埋蔵文化財調査課）

はじめに

北部九州の墓と副葬品の在り方は、東アジアにおける時代背景や交流の状況を反映している。ここでは、まず「1 北部九州における墓の変遷」で主要墓群の状況を概観し、「2 有力層墓の出現と区画墓の機能」で有力層墓の特徴を明らかにする。そして「3 朝貢国から外臣へ」では、漢帝国との関係のなかで倭人社会の画期を見出す。「4 東アジアにおける弥生後期の墓制」について後期の墓制から看取される情報を分析して結びとする。

1 北部九州における墓の変遷（表1）

北部九州の墓制を象徴する甕棺墓は、現在3万基近くが確認されている。そのうち成人用の大型甕棺（成人棺）は全体の3分の1で、およそ1万基にのぼる（小池 2010）。集団墓における主体部の構成は、地域や時期によって異なり、甕棺墓と木棺墓（石槨墓を含む）や石棺墓（石蓋土壙墓を含む）などと共存する場合が多くみられる。表1は、北部九州の主要墓群の変遷を平野や主要水系ごとに配したもので、主体部の構造を、Kは甕棺墓、Mは木棺墓、Sは石棺墓の略で示したものである。

表1 北部九州における主要墓群の様相

時期	唐津	糸島	早良	福岡・糟屋	筑紫	佐賀	宗像	遠賀川流域	周縁地域
I (前)	大友 M 葉山尻 S	新町 K・M 石崎矢風 K・M	入部 K 藤崎 M 田村 K	雑餉隈 M 下月隈天神森 M・K	峯 M 中寺尾・剣塚 K	久保泉丸山 S 礪石 BS	田久松ヶ浦 M		
I (後)	宇木汲田 K・中原 K	志登・新町 K・M	藤崎 K 吉武 K	伯玄社・金隈 K・M 松ヶ迫 K	中寺尾・剣塚	東山田一本杉・増田	久原 M		宇久松原 K・笛吹 K (五島)
II (前)	朝鮮細型銅剣文化複合 徳須恵 K 宇木汲田 K	飯氏 K・M 石崎 K	吉武高木・吉武大石 K・M 岸田 K・有田 K・野方久保 K	板付田端 K 金隈 K 皇石 K・馬渡東ヶ浦 K	大木・三沢ハサコの宮 K 国分松本 K	東山田一本杉 K 尼寺一本松 K 本村籠 K	朝町竹重 M	金丸 M 慶ノ浦	里田原 (北松浦) 金海 K (慶南) 梶栗浜 M (長門) 白寿 K (薩摩)
II (後)	宇木汲田 K	久米 K 向原 K	吉武大石 K・M 岸田 K・M	比恵 K・M 諸岡 K 門田 K・金隈 K	永岡 K 国分松本 K	吉野ヶ里墳丘墓 K・柚比 K・M 高志神社 K	朝町竹重 M 田熊石畑 M	金丸 慶ノ浦・原田	石田大原 (壱岐)・神ノ崎 (五島)
III	宇木汲田 K	西古川 K、飯氏 K	吉武樋渡 K 浦江 K	須玖岡本門田・金隈	隈・西小田国分松本	吉野ヶ里墳丘墓・柚比	久原 M	鎌田原 K・M	
IV (前)	中原 K	井原塚廻 K、三雲南小路 K	吉武樋渡 K 東入部 K 岸田 K	須玖岡本 D 地点 K 上月隈 K	東小田峯隈・西小田	吉野ヶ里墳丘墓 K	富地原梅木 SK	立岩 K 鎌田原 K・M	吹上 K (日田) 富の原 K (大村) 景華園 K (島原)
IV (後)	中原 K	三雲南小路 K	有田117次丸尾台 K 浦江谷 K	門田 K 弥永原 K	立明寺 K 道場山 K	二塚山・柚比 K・M	富地原梅木 M 朝町竹重 M	立岩 K	
V (前)	桜馬場 K	井原鑑溝 K 三雲・井原ヤリミゾ M・K	有田117次 K 西新町 K 浦江谷 K	須玖岡本 B・宝満尾 M・宮の下 K 弥永原 M・K	道場山 K 吉ヶ浦 K	二塚山 K 三津永田 K 石動四本松	朝町竹重 M	五穀神社 S 笹原石棺墓	地藏堂 S (長門) 塔の首 S (対馬)
V (後)	中原 M・K	飯氏 K-7 平原1号墓 M 泊熊野 K	野方塚原 K	臼佐原 S	良積 K	枕島山 S 尼寺一本松 K 城原三本谷 S	徳重高田 S	原田 S-1	原ノ久保 (壱岐)・前田山 (京都)
VI	三国	東二塚 K 東五反田 K 三雲寺口 S-2	野方中原 S 野方塚原 K	博多遺跡群 K	良積 K 祇園山 S・K				徳永川の上 S (京都)

※ 時期区分は、I 期：早期～前期 II 期：中期初頭～前葉 III 期：中期中葉 IV 期：中期後葉 V 期：後期 VI 期：終末・古墳早期とする。

2 有力層墓の出現と区画墓の機能（図1）

弥生時代の集団墓のなかで副葬品を有するものや副葬品はないが集団墓のなかで墓壙が立派で、墓群の中心に位置する墓は、有力層墓とよばれる。北部九州において有力層墓の萌芽は、磨製石剣や柳葉形磨製石鏃を副葬する支石墓や石槨墓などが出現する弥生早期から前期の古段階に認められる。

墳丘や溝によって周囲の墓群と差別化をはかる区画墓は、筑紫の峯遺跡（福岡県筑前町）のように弥生前期前半には出現し、Ⅱ期前半には板付田端、Ⅱ期後半にはⅢ期・Ⅳ期まで存続する吉野ヶ里遺跡の墳丘墓、Ⅲ期には吉武樋渡で墳丘墓が造営される。

弥生中期に、青銅の武器の副葬が始まると有力層墓は多様化し、副葬品や墓の構造などの面で重層性が顕著となる。そして中期後半（Ⅳ期）に有力層墓のなかで副葬品と装身具が際立ち、墳丘や標石など突出した構造をもつ厚葬墓が出現した。三雲南小路と須玖岡本D地点である。区画墓を構成する墳丘や区画溝、標石は、厚葬墓と周囲の墓群を差別化するための装置と捉えることができる（常松 2011）。

3 朝貢国から外臣へ

「楽浪海中有倭人、分爲百余国、以歳時来献見云」『漢書』地理誌には、倭人が東夷の絶域から皇帝の徳を慕って朝貢を行なった様子が記されている。前1世紀、倭人は、朝貢国として前漢に容認され、銅鏡や璧、辰砂、鉄素材など漢代の文物の流入を推し進めた。そして漢式鏡などを有力層の間に再分配し、墓に副葬することで権威を継承するシステムを確立した。

1世紀前後の北部九州は、漢からみれば東夷からの情報の起点であり、本州・四国にとっては東アジア世界への門戸としての役割を担っていた。57年、北部九州を領域とする「倭奴国」は、対外交渉の主導権を握り、金印『漢委奴国王』の入手を果たす。志賀島（福岡市東区）で発見された金印は、『後漢書』『倭伝』の印綬に該当する。弥生中期後半の倭人は、「漢帝国の周縁部の種族」であり、朝貢国の域を出なかった。一方金印下賜は、「東夷の外臣」として皇帝を頂点とする秩序に組み入れられたという点で画期である。

4 東アジアにおける弥生後期の墓制

2・3世紀代に吉備、出雲、伯耆、丹後、東海など各地で造営された大型墳丘墓は、平野や水系を単位とする盟主の誕生を示唆している。それら大型墳丘墓は、同時期の北部九州の有力層墓を凌駕する規模といわれる。しかし北部九州では、吉野ヶ里や吉武樋渡の墳丘墓のように前2～1世紀代（Ⅱ期後半からⅣ期）に、大型墳丘墓（区画墓）の段階を経ていることを忘れてはならない（図1）。

『魏志倭人伝』の「其死有棺無槨、封土作冢」その遺体に棺はあるが槨はなく、盛土をして塚をつくる、という記述は、棺や副葬品をおさめるための「槨」をもたない倭人の墓制を貶めているのではなく、薄葬が尊ばれた三国時代の風潮の中で倭の墓制を高く評価したものとされる（渡邊 2012）。後漢鏡が集中する弥生後期の有力層墓は、「イト」の井原縄溝と平原1号墓が傑出し、その間をうめる有力層墓は三雲・井原遺跡群で継続的に造営された。「イト」における後期の有力層墓は、埋葬主体に銅鏡を集中副葬するが区画墓の規模は抑えられている点で、倭人伝の記述とも矛盾しない。

まとめ

金印『漢委奴国王』の印文と『魏志』に登場する「奴国」、文字は同じだが、そこには2世紀近い時間的な隔りがある。1世紀代に金印を入手したのは「倭奴国」（富谷 2012）で、制海権を考慮すれば壱岐・対馬から五島までの島嶼を含む北部九州である。その中心は、青銅器やガラス製品の工房址が集中する福岡平野の「ナ」と厚層墓が分布する糸島地域の「イト」と考えられる。両者は役割を補完しながら外交や生産の中核として機能したのであろう。

2世紀後半の「倭国大乱」を経て、3世紀前半になると「倭王」卑弥呼による機構の再編が行われた。北部九州は、女王国からおくられた大率によって分断・解体された。『魏志』に登場する「奴国」が1世紀代に「倭奴国」を構成した「ナ」に相当することは、Ⅴ期後半の墓制と副葬遺物の傾向から類推されるのである。

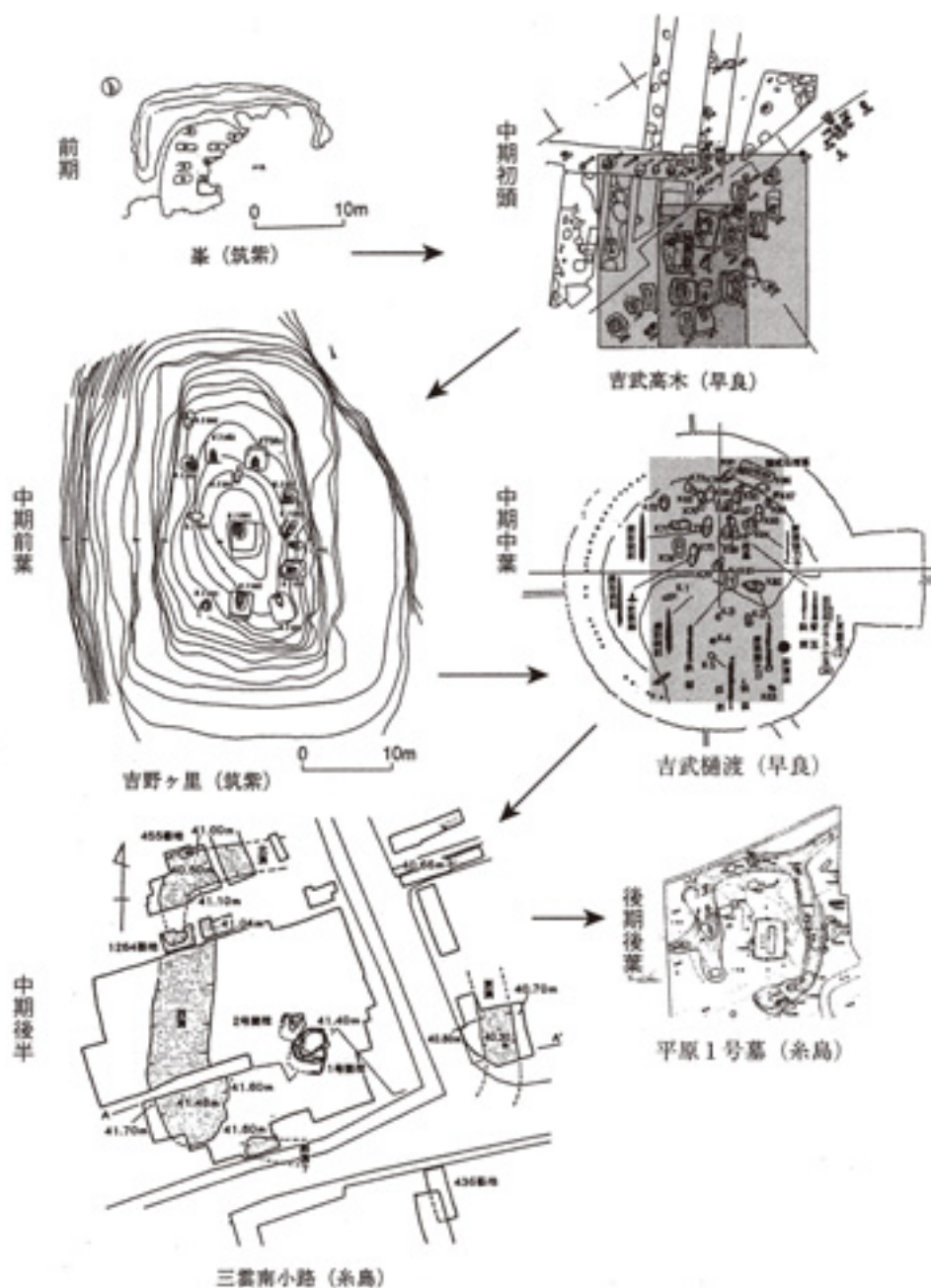
【引用・参考文献】

小池史哲（編）2010「甕棺墓遺跡 日本編」『東アジアの甕棺墓』国立羅州文化財研究所

常松幹雄 2011「墓と副葬品の変貌」『弥生時代の考古学』3、同成社

富谷 至 2012「四字熟語の中国史」岩波新書 1352

渡邊義浩 2012『魏志倭人伝の謎を解く』中公新書 2164



第1図 北部九州における区画墓の変遷